

図書館だより

～ 今月のおすすめ本 ～

街路樹の呼び名事典

亀田龍吉

四季折々に表情を変えて、道行く人々に季節の移ろいを教えてくれる街路樹。普段、何気なく目にする木々の名前の由来や生態など、知っているようで知らない街路樹の魅力に迫ります。(東)



地震と独身

酒井順子

東日本大震災で語られた多くの家族の物語。それとは対照的に、見えてこなかった独身の姿。休みなく働いた人、婚活に挑んだ人、特技を活かしてボランティアに励んだ人。報じられることの少なかった独身者の「震災物語」。(西)



▶詳しくは、東図書館 (☎ 62・0190) 西図書館 (☎ 75・5406) へ。



ドクターTのひとりごと

その23 『『経済人口』10万人を

目指すまちづくり』

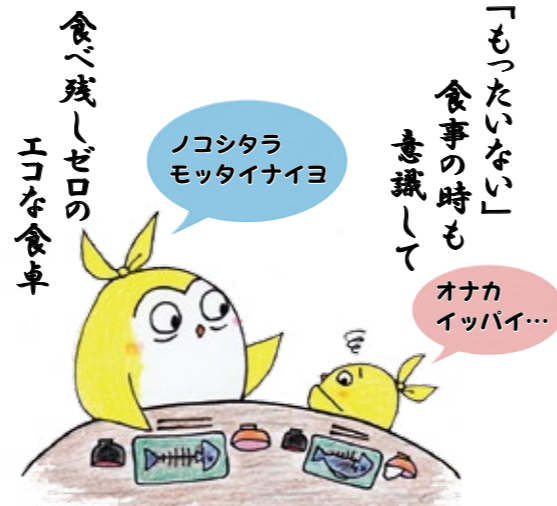
少子高齢化と人口減少による地域経済の落込みが地方自治体で益々深刻な課題となっています。このような状況に対応するため、定住人口の減少抑制と交流人口（観光客などの市外からの入込客）の増大を図らなければなりません。定住人口1人当たりの年間平均消費支出額は124万円と試算され、その約70%の86万円が地域で消費されています。この地域消費額を交流人口で補うことができれば、定住人口1人増に相当します。定住人口と交流人口の地域消費額を86万円で割って換算した人口を経済人口と定義し、経済人口が拡大するまちづくりを推進したいと考えています。平成25年度の定住人口は約8.6万人、交流人口は約200万人（消費総額は推定約80億円、これは定住人口約0.9万人の地域消費額に相当）であり、経済人口は約9.5万人となります。定住人口の自然増は期待できず、UターンやJターン増で社会減を抑制し、交流人口の宿泊客増となるような施策が必要です。経済人口拡大のため、活力ある（雇用創出、観光振興など）まちづくり、安心（医療福祉、子育て・教育環境の充実など）のまちづくり、心豊かに暮らせる（スロースライフ、自然・歴史文化の重視など）まちづくりを推進します。



ごみブクロウの (方法) 『エコな生活ホーホー』教えます!

ごみブクロウ流

「530(ごみゼロ)のすすめ」



家庭から出される生ごみのうち、約4割が食べ残し。これには食事の残りだけではなく、手つかずのまま捨てられる食品も含まれるよ。「もったいない」の気持ちで、「食材を最後まで使いきる」「作りすぎない」「食事は食べきる」を心がけよう! 《生活環境課》

防災ひとくちメモ

「原子力防災のしおり」を発行

ポスティングにより全世帯に配布

府および市では、国において原子力災害対策が全面的に見直されたことを受け、その内容を反映させた「原子力防災のしおり」を新たに発行しました。

4月中旬～5月上旬にかけて、市内の全世帯に配送業者がポスティングにより、ご自宅の郵便受けなどにお届けしますので、ご活用ください。

配布漏れなどにより届かなかった場合は、危機管理・防災課までご連絡を。後日、お送りさせていただきます。

また、主な市公共施設にも配置しておりますので、ご利用ください。

◆配置する主な市公共施設

危機管理・防災課、西支所、加佐分室、中央・東・西・南公民館、大浦・城南会館、東・西図書館、東・西消防署

◆市ホームページに掲載

アドレス <http://www.city.maizuru.kyoto.jp/>

▶詳しくは、危機管理・防災課 (☎ 66・1089) へ。



「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する約1万2千点の資料の中から、今回は「防寒コート」を紹介します。

シベリアでは、一年の半分以上が冬で、気温はマイナス30℃以下にもなり、寒さから身を守ることは、命を守ることと同じでした。当館には、そうした極寒のシベリアで、寒さから抑留者の命を守った防寒コートが多数収蔵され、その一部を展示しています。

防寒コートの中には、関東軍で支給されたものや、シベリアなどの収容所で支給されたものなど、さまざまなものがあります。

関東軍の防寒コートには、作業などで一時的に上昇した体温を調節するために、両腕の袖が取り外せる工夫がされていたものもあります。シベリア抑留生活では、その袖を取り外して、空腹を満たすために、黒パンと交換した抑留者もいました。耐えがたい寒さと空腹の両方を満たすことができない極限の状況の中で、苦渋の決断だったことでしょう。

収容所で支給された防寒コートには、紺色のものが多く、他にはカーキ色のものもあります。収容地区や収容所内での役割など、色の違いによって何らかの区別がさ

れていたのではないかと推測されます。また、中には上腕の部分だけが白い布になっていて、収容所での個人番号と思われる数字が記されたものもあります。生地は、裏に起毛されたものもありますが、マイナス30℃の極寒の中、突き刺さるような冷たい風が首や袖から入り、到底、寒さをしのぐことは難しかったと証言している方もいます。

それでも、極寒のシベリアで、防寒コートが多くの命を守ってきたことには違いありません。不幸にも、持ち主が亡くなったコートは、また誰かの寒さを防ぎ、命をつなぐために使われたのでした。

当館に寄贈された防寒コートの多くは、帰国後も大切に保管されていたものです。それは、無事に生還できたことへの感謝の気持ちと、祖国の土を踏むことができなかった戦友へのさまざまな想いを記憶に留めておくためだったのかもしれませんが。

▶詳しくは、引揚記念館 (☎ 68・0836) へ。



▲防寒コート

広げよう人権の輪 ～ 子どもの未来のために ～

中学2年のA君は「勉強なんか面白くない、全然分かんない」と学習に対して全く意欲がありませんでした。友達と一緒に過ごすときが一番楽しいと、深夜まで遊び回り、昼夜逆転の生活を送る中で、万引きや窃盗を繰り返したあげくに補導され、家庭裁判所で保護観察という審判を受けました。

私は、A君と関わる機会があつて、何度か会ううちに、他人に対する攻撃的な態度とは反対に、内心では誰かに助けてほしいと思っているのではないかと感じるようになりました。強がっていますが、私の話には「うん、うん」と聞く素直さがあります。普段は感情をあまり表に出さないA君ですが、これまでも、きつといくつもの信号を出していたのだと思います。彼が発するSOSを周りの大人がもっと早くキャッチしていれば、これまでのようにはならなかったのではと、とても残念に思います。

A君は過ちを犯したのですから、それに対しては、きちんとした責任を取ると同時に、自分の力で立ち直っていかなければなりません。彼が、保護司との定期的な面談と指導・助言を受けるようになってから約1年が経とうとしています。この間、熱意

ある保護司の関わりもあり、近頃では「俺はこのままで良いのだろうか」という思いも芽生えてきたようで、それが彼を変えているように思います。表情も柔らかくなり、学校にもきちんと行くようになってきました。

青少年を取り巻く社会環境の変化や価値観の多様化は、成長過程における人格形成に強い影響を与えています。子どもたちの日々の変化を見逃さず、彼らが発するSOSを素早く受け止めることで、未然に過ちを防ぐことがあります。過ちを犯してしまったあとで立ち直ろうとする子どもたちに「あの子は…」というレッテルを貼り、色眼鏡で見るとはならず、一人の人間として自信を持って歩んで行けるように見守り、励まし、支えていくことが私たち大人役目なのではないでしょうか。

《人権啓発推進室》

